

在日作家が描いた児童文学の六五年

李慶子
リ キヨン ジャ

戦後まもなく一般文学では早くに作家を輩出し、その作品はマスメディアを通じて広く知られていったのとは対照的に、児童文学は書き手そのものが少なかつたこともあって、ほとんど俎上にのぼることはなかった。

ちなみに一般文学における在日朝鮮人作家たちは、三つの文学世代に分けることができるといわれている。第一世代は植民地時代に日本語を強制されて青春を過ごした世代で解放後は自らの表現手段として日本語による作品を発表した金達寿や『朝鮮冬物語』で知られる詩人の許南麒である。後に児童文学上で名前があがる韓丘庸は許南麒との出会いから児童文学を志し、高甲洵、尹正淑、李慶子は七〇年代初め、東京の同じ文学教室で許南麒の教えを受けている。

第二世代は少年時代に解放を迎え、奪われた民族性をどうしたら取り戻せるかを逡巡した世代で、六〇年代半ばに登場した。その筆頭格が李恢成である。そして八〇年代後半から九〇年代にかけて第三世代といわれる新しい書き手が次々登場した。彼らの作品が賞をとり注目されるようになる、評論家や研究者の間で在日朝鮮文学という呼称が定着していった。それを今、児童文学上で安易に使うことに、私自身は疑問をもっている。なぜなら、作家も作品も

まだ少なく、十分な検証がなされていないからだ。しかし、いざ、一般文学でもそうであったように、この問題を取りあげて論じるときがくるかもしれない。

さて、戦後、児童文学ジャンルとして初めて登場したのは「きょうが、お父さんのなくなった日から、四十九日めです」で始まる安本末子の『にあんちゃん 十才の少女の日記』（光文社、筑摩書房 '58年）である。両親を失った四人の兄妹が、炭鉱の特別臨時工として働く長兄のわずかな賃金での生活を余儀なくされ、やがて一家離散の道をたどっていくその過程が末子の眼を通して克明に記されている。日記が書かれた時期は朝鮮戦争が休戦したことで、以後、日本はその戦争特需で復興し豊かになっていくが在日の暮らしは、なんら変わることはなかった。作品は今村昌平監督によって映画化され話題をよんだ。現在も版を重ねているが、この後に続く作品の登場は、十数年を待たなければならなかった。日本語による児童文学作品がかくも長く登場しなかった背景には在日朝鮮人の教育問題が深く関わっている。いつ帰国しても言葉に困らないようにと、日本全国に自主的に建てられた朝鮮学校で母国語教育がなされ、同時に母国語による創作が奨励された。先に述べた許南麒指導の文学教